

吉野裕子著

陰陽五行と日本の民俗

人文書院、1983年、298頁

井上 順孝

学術的研究とりわけ人間についての歴史的社会的研究の分野では、研究のやり方そのものが、往々にして一種の謎解きの作業となる。その方法次第では、結果は三文作家による推理小説もどきになったり、有無を言わせぬ判事の判決文風になったり、さまざまである。まさに対象を切り刻み、並べ直すそのやり方が腕の見せどころということになる。本書の切れ味は一読した時点ではなかなか見事と感じられるが、同時にそのことが、微妙な効果をもたらしている。一方で読者はこの書によって新しい世界を開いて見せられたという気がするが、他方で何か巧妙に丸めこまれたという感じもするのである。

陰陽五行説が日本の民俗に深く関わっているという考え方は、無論全く新しい考え方というわけではない。にも拘わらず、それが具体的にはどのような形で指摘できるのかについての体系的になされた研究はこれまでほとんどなかったと言ってよからう。言うまでもなく、日本の文化は中国の影響を強く受けており、従ってその影響は日本宗教のほとんどあらゆる側面に及んでいると考えねばならない。だが、仏教や儒教の影響についての研究に比べると、道教あるいは陰陽説の影響についての研究

は余り盛んでなく、ようやく最近になっていくつかの注目すべき研究が相次いで刊行されるようになった。本書は基本的にはそうした一連の動向の一部を形成するものと捉えることができよう。

著者はこれまでも、『陰陽五行思想からみた日本の祭』『日本人の死生観』など、陰陽五行説の日本文化への関わりをテーマとした著書を多数著している。「序」によれば、本書は『陰陽五行思想からみた日本の祭』の姉妹篇に当たり、後者においては第二の主要テーマとされていた、次のようなテーマを改めて前面に押し出して叙述されたとされる。

古来、日本の為政者は、中国にならい、順当な四季の推移の祈求に熱心であった。一年の推移を自然に任せて放置せず、人間の側でも、五行の法則を使って、順調な推移を促す、要するに自然の移り変りに対する人為的の促し、それが日本の祭りや歳時習俗のきめてになっている場合が非常に多い。同時に災害に対する呪術にも、五行の法則が到る処に使われている。

ここで、日本の民俗の中でも特に歳時習俗と自然に対

する呪術的行為が問題にされていることが分かる。構成を見ると、第一章で陰陽五行思想の概要が説明され、第二章以下で、陰陽五行と日本の民俗(迎春呪術、対震呪術、対雷呪術、対風呪術、色彩の呪術、死屍呪術、正月と盆、山の神と田の神、歳時等)との関わりが論じられている。

第一章は陰陽五行説についての概説であるから、特に問題はないが、第二章以下での論議が問題となる。ここで具体的に取り上げられている例は、既に著者のこれまでの書に於いても取り上げられたものが多く、特にこの書で新たな例が豊富に提出されているというわけではない。

五行説が今日の日本人にどう受け取られているかについての著者の基本的見解ははっきりしている。本書250頁における、門松の淵源についての考察の中に次のような主張が見られるが、これは単に門松についてのみなされた主張ではなく、本書全体を通しての著者の主張でもあると思われるので、以下に引用しよう。

今日まで根強く残る正月行事としての門松の淵源は、たとえ原始信仰にあるとしても、陰陽五行が入ると、その古代信仰の上に、より強烈に「理」が蔽いかぶさり、其方が優位を占めるに至る。しかもこの「理の優位」にもかかわらず、この「理」は忘れ去られ、説明がより簡単な「信仰」、つまり「神の依代」ということに「理」はおきかえられて、社会一般にも学問的にも理解されているのが現実の姿と思われる。

ここには従来の日本民俗学とはまた異なった発想法がうかがえる。陰陽五行説を「理」として捉え、個々の民俗に対する人々の信仰次元での解釈とは一線を画していることが特徴的である。こうした著者の着眼のしかたや、その研究のおすすすめ方には大いに興味を惹かれるが、一方でその論法や基本的前提などについて疑問を感じる点もある。冒頭に述べたようなどこか巧妙に丸めこまれたという感じはどこから来るのであろうか。どうやら叙述の背後にある前提や個々の解釈の妥当性に今一つ説得性に乏しい点があるからのように思われる。具体的に言えばそれはおよそ次のようにまとめられる。

(1) 本書では陰陽五行説の諸原理として、五行相生、五行相剋、三合の理、その他九星、八掛などが取り上げられているが、それぞれの問題とされる民俗事象をば、どの原理で説明するかについて恣意性が介在する可能性があるように思われる。例えばなぜある問題は五行相剋で説明されるのであって、五行相生あるいは三合の理によるのではないのかという当然浮かぶ疑問への配慮がなされていない。

(2) 五行相剋、五行相生などを当てはめて民俗現象を説明する場合、五行配当図が利用されるが、その利用のされ方に恣意性を感じさせるときがある。

(3) 例として取り上げられる民俗の取り上げ方にも恣意性が感じられる。一体、著者は日本の民俗にどの程度五行説が入りこんでいると考えているのか。五行説で説明できる民俗現象だけが取り上げられているという疑問が生じざるを得ない。

これらのことについて二、三具体的な疑問を掲げてみよう。まず、(1)と(2)に関わる点についての例である。78頁では、鳥追いが春迎への呪術であることを示すために、「白の鷺は金気、鴉の黒色は冬、冬鳥の鴨もまた寒気を象徴し」と述べてある。ここは何故「鷺の白色は秋、鴉の黒は水気」ということにならないのであろうか。100頁では「鬼木」を焼く行事が水気追放による迎春呪術である、とされているが、薪を焼く行為は「火剋木」とは解釈できないのか。また、「大豆は丸く固く、製品の豆腐は白色で、いずれも金気の特徴である。」(84頁)とされているが、大豆や豆腐を金気と看做すことは陰陽五行説では決まりきったやり方なのか、それとも著者の分析なのか本書を読む限りでは判然としない。もし後者であるとするなら、詭弁じみているかもしれないが、大豆は黄色く、豆腐は柔らかく四角ではないか、とも反論できる。

(3)については例を挙げるまでもないと思われる。ただ、これに関連して、一つの民俗儀礼を取り上げる場合でも、その通過儀礼の側面よりも専ら年中行事の側面に視点を当てることによって解釈を貫かせようという傾向が見られる。例えば、雛女祭りの分析ではそれが零歳の長女を中心にした祭であるということよりも、それが五月に行われる祭であるという点に主眼をおいて、易からする意味づけを試みようとしている。これもまた別の意味で恣意性を感じさせる点である。

本書は随所で従来の通説に挑戦する見解が示されているのが特徴で、それは実に新鮮に感じられるのであるが、それをどの程度まで自信をもって提示しているのか測り難いところがある。「『易』と日本の民俗」の章では、十二ヶ月それぞれの和名に関して、従来の通説に対抗して易による語源説をいくつか述べてある。例えば、師走の師の字には「大」「万物」の意味があつて、師走とは、すでにはじまりだした万物の動きというものをつかえたことによって付けられた名称とされる。また陸月は「地天泰」の易の掛が示す天と地との和合に由来するとされる。その他、卯月、水無月、神無月についても易をもとにした解釈が施されている。極めて画期的な指摘であると思う反面、それが他の説に代わるほどのものかという疑問が消えない。例えば、陸月というのが人々が寄り集まり陸みあうことからきたという従来の通説よりも、易から判断された天地森羅万象が陸みあうことの意と解するのが適切と主張する根拠がそれほど説得的ではない。また、

なぜある月は易に基づいて付けられた名前であり、他はそうでないかの理由については、どう説明するのであろうか。思うに単に陰陽五行説でも説明できるというのではなく、陰陽五行説で説明するのがもっとも適切であると考えられる場合と、陰陽五行説によって説明するのも可能であるという事象の区別が明確になされていないのではないか。つまり、陰陽五行説はそのどれかの原理を個々の民俗事象に当てはめて解釈することがそれ程難しくない体系であるので、逆にその必然性について疑わしさが出てくるということである。これはやはり何らかの形で克服されるべきものではなからうか。

こうした、本書のいわば説明不十分であるが故に生じる疑問の背後に、もう一つ著者の構想そのものについていささかの基本的疑問がある。陰陽五行説は確かに、日本の民俗に深く関わっていると考えるべきである。しかし、それが「理」として受け入れられた時代があったとするなら、そのことについての歴史的背景をどう考えているか知りたく思うのである。これについての疑問は以下のようにまとめられる。

(1) 陰陽五行説を「理」として日本の民俗の中に組込むという作業を推進した人々はどのような人々であったのか、そこにはなにか特別の要請が働いていたのか、あるいは自然に流布したのか。そうしたことについての見通しが見されていない。

(2) 日本の民俗の中に陰陽五行説を当てはめることによって、それまで不明とされていた現象の説明に貢献することがあるのは分かるが、実際に人々が陰陽五行説の「理」を認識した上で、個々の民俗を行っていたと言いつける時代があったと著者は考えているのであろうか。

(3) 五行説をもとにした中国伝来の習俗もしくはその変容したものであると判断される習俗と、そうした影響を受けていない土着の習俗との区別をどうやってやれるのであろうか。つまり、五行説とは全く関係無く展開した習俗であるにも拘わらず、たまたま五行説でうまく説明するのが可能なものというのがあるとおかしくはない。それはどうやって見分けられるのか。さらに言うならば、日本人による陰陽五行説の受容は、雑然となされたかと考えるのか、それともある程度体系だてなされたかと考えるのか。

陰陽五行説に基づいて呪術的な儀礼が発達し、強化されるにしても、そこにはある程度選択があると思われる。

つまり、特定の目的に対しては特に厳密な呪術の体制を敷くということである。中国においては四季の循環を順調にすることが主たる目的であったと著者は捉えているが、日本でも全くそれと同じであったのか。日本で陰陽五行説が受容されるに際して、その受容のされ方に選択性はなかったのであろうか。例えば、中国で行われた、迎春呪術としての「犬の磔」は、日本に於ては犬を実際に殺すということは避けられて「餅犬」という形で一般に広まったと著者は述べている。ここでは「犬の磔」と「餅犬」とを結びつけるためにこのように説明しているわけだが、こうした受容の際の変容については一般的にどういう見通しを立てているのであろうか。

本書が「日本の民俗には陰陽五行説で解釈できる面もある」ということのみを主張しているのであれば、以上述べたようなことは揚げ足取りに過ぎなくなる。しかしながら、本書の目論むところは決してそれにとどまっていない。日本の民俗行事の意味づけを探るに関して注目すべき問題提起をしている。考えようでは、従来の日本民俗学や神道学の在り方に根本的な問題をつきつけていると看做すことができる。

とすれば、やはり、研究の枠組について著者の考えをもっと明確にすべきではないか。ことに、その歴史的展開に関する仮説は実際はほとんど示されていないと言える。特に、日本の民俗の源流を考えるに際して、これまでの民俗学の蓄積とどう関わらせていこうとしているのか、その点が気になった。再三述べるように著者は人々の間で信じられている儀礼に対する意味づけとその儀礼が含みもつ「理」とを分けて考えている。すると、民俗学＝「儀礼遂行者のレベルでの儀礼への意味付けを明らかにする立場」、著者の立場＝「儀礼遂行者にも明白でない、儀礼にこめられた理を明らかにする立場」という図式が描けそうである。この二つはどう関係するのか。対立か相補か、あるいは後者による前者の止揚か。ときには従来の通説を退けようとする叙述の姿勢が見られるだけにこの点ははっきりさせて欲しいと感ずる。

とはいえ、陰陽五行説が日本の民俗とどう関わっているかの追究は興味深いテーマである。それがどのようになされるべきかについて、本書は一つの明快な方向性を示しているのであって、その意味では本書の果たす役割は決して小さいものではない。